The Journal of Tokyo Medical Association

TMA

医師と東京都医師会を結ぶ会報誌

1
2024 VOL.77
NO.1

特別対談

都医がひらく希望

東京都医師会代議員会 議長
世田谷区医師会 会長
窪田 美幸

東京都医師会 会長
尾﨑 治夫

都医が ひらく 希望

東京都医師会代議員会 議長
世田谷区医師会 会長
窪田 美幸

新しい力で東京の医療を変えていく

東京都内には48の地区医師会、
12の大学医師会、そして都立病院医師会があります。
超少子高齢社会となりますます困難な時代を迎えるにあたって、
各地域で医療・保健・福祉に貢献する地区医師会と
東京都医師会はどのように連携していくべきなのでしょう。
地区が抱えるさまざまな課題、医師会活動の意義、
そして東京都医師会が指し示すべき医療のあり方とは。
東京都医師会の役員を支える代議員会議長であり
世田谷区医師会会長でもある窪田美幸先生をお迎えして、
新しい年のはじまりに、近未来の医療をどう切りひらくのか、
尾﨑治夫会長と語り合っていただきました。

対談日：2023年11月16日 京王プラザホテルにて

東京都医師会 会長
尾﨑 治夫

01 地区医師会は今ある問題に向き合い 東京都医師会はその先の未来を考える

尾﨑　窪田先生は代議員会の議長として2期目となりました。代議員会の議長に就任いただいたのは、理事の方から引き受けてくれませんかとお声がけさせていただいたのがはじまりだったと思います。

窪田　私は数年前から世田谷区の代議員でいましたから、理事の先生方のことは存じ上げておりましたし、尾﨑会長はほんとうに雲の上の存在だと感じていました。ですからある日、代議員会の議長就任についてのお電話がかかってきて驚いたことを覚えています。東京都医師会は女性を登用することに非常に積極的で、そうしたことからお声がかかったのかと思っているのですが、尾﨑会長は女性の登用についてどうお考えなのでしょうか。

尾﨑　全国的にほかの道府県医師会を見ると女性の登用はまだまだ少ないのが現状です。そんな中で東京都医師会の場合は、理事にしても監事にしても、そして代議員会の議長にしても、適材適所で活躍していただける優れた女性の方がたくさんいらっしゃいます。そうした人材をどんどん登用していこうという気持ちは私自身強く持っていますし、そのための環境も整っています。

理事会でも委員会でも、男性だけで集まって議論していると考え方がどうしても偏ってしまいます。たとえば小児科や産婦人科の医療の政策を論じるときに、女性ならではの視点や、出産や育児を経験されている方の意見はとても大事です。さまざまな場面にある程度の人数の女性がいることで、東京都医師会としてバランスの取れた考え方や方向性が定まっていくと私は思っています。

窪田　私は長く世田谷区医師会の会長をやっておりまして、世田谷区医師会で女性の先生をたくさん登用しようと思っても、お子さんがまだ小さいとなると夜の会議には出られないというようなことが多々あって本当に難しいですね。なかなか思うようにいかない中で、東京都医師会が女性を積極的に登用する流れをつくっていただいていることはとてもありがたいと思っています。尾﨑会長は5期目となりましたが、その前の副会長の頃から長く東京都医師会を見られてきて、組織全体の風通しや変化についてどう捉えておられますか。

尾﨑　かなり変わってきたと思っています。私が副会長だった先代の野中博会長の頃は、それ以前の体制から大きく改革していきました。ただ当時はその前の会長の考え方を持った方が役員の中に

もまだいましたし、たとえば事務局も雇用形態も、今とはまったく違う旧態依然の仕組みで動いていました。職員も、給料は安定しているから波風を立てずに無難に働いていればいいという意識の方が多かったんですね。それが改革を進めていくうちにみんなの意識が少しずつ変わってきて、東京都医師会の中でたとえばこの部署にいたらこういうことをやっていかないといけないと自ら考える人が増えてきました。一人ひとりが問題意識や使命感を持っていて、私から見て非常にアクティブに活性化したと感じています。

これからの10年20年で世の中が全く変わってしまうことは、これまでにも強く予測されていました。執行部に1期2年という区切りがある中で、毎期同じような施策を繰り返していると、あっという間に10年が経ってしまいます。かつての高度経済成長期であれば、経済は伸びて財源も増えて診療報酬は上がっていくわけです。将来の不安もなく、医療政策がどんどん実現していくエネルギッシュな時代でした。ところが今は少子化と高齢化が進み、経済は落ち込んで財源の確保もままなりません。医師会全体の力が弱まっていく中で、そういう時代に立ち向かうんだという意識が各役員・各職員になければ、東京の医療を維持していくことはできません。だからこそ5期目に入った今は、これまでとは違って将来に向けて困難を乗り越えていく体制づくりができていると感じています。

窪田　何かと暗いニュースが多い中での明るい話題ですね。

尾﨑　そう思います。窪田先生は代議員会の活性化や活発な議論、医師会活動へのスムーズな反映のために、議長として望むことやお考えなどはありますか。

窪田　私が最初に議長になったときに尾﨑会長からそういう宿題をいただきました。以来ずっと頭をひねっておりますが、近年のコロナ禍で直接対話する機会が制限されたことで前期は難しかったですね。事務局の方に無理を言って私専用のメールアドレスをつくっていただき、代議員会で会長に質問したいことなどをメールで募集しましたが1通もありませんでした。そこでまたいろいろと考えを巡らせて、これは代議員会ではなく地区医師会になりますが、各会長の先生方が東京都医師会の理事会を見学することをはじめたらどうだろうという提案をさせていただきました。

東京都医師会がどういう活動を行っ

ているかを身近に感じることによって、自分たちが何をしなければいけないかが自ずとわかってきます。まずは医師会活動を知ることが大事だと思います。私は代議員会の議長を務めるまで東京都医師会を外から見ていましたが、理事会に参加して内から活動状況を見ていると、東京都医師会は今よりも少し先の近未来のことを考えなければならない立場にあると感じました。対して世田谷区などの地区医師会は、今ある問題にしっかり向き合わなければならない立場にあることがわかってきたんです。ですから地区医師会はまず自分たちの目の前にある問題を解決していきましょう、それは東京都医師会を支えることになり、東京都医師会がこれから先の私たちの未来のことを考えてくれると私は地区医師会のみんなに伝えています。

尾﨑　窪田先生がおっしゃるように、実際の医療の現場は地区医師会にあります。そこで区や市の行政と密に関わって医療の問題を解決していくことはとても大事で、うまく解決しないような問題は東京都医師会に上げてもらえればこちらでもバックアップするという体制があります。さらに我々としてはもっと先の見通しを示して一つの道しるべにしてもらえればいいなと思っているところもあります。地区医師会の会長で行う会長会議が月に1回あるので、コロナ禍が落ち着いた今は対面で会ってコミュニケーションを取れる場がありますが、そのほかの代議員と膝を突き合わせて話し合うような機会はあまりありません。もっと気楽に意見交換できる場があればとは思いますが、お互い忙しい身なのでなかなか実現しませんね。

窪田　尾﨑会長はじめ執行部の激務はすさまじいものがあり、いつか健康を害されるのではないかと冷や冷やしております。皆さんとても優秀でよく働いていらっしゃいますが、いずれ新しい力に代わっていかなくてはならないと思います。私は議長として、東京都医師会の執行部と代議員の先生方との橋渡しが責務ですが、加えてこれから必要になる新しい力、若い人材をどうにか発掘できないかと考えています。それについてもやはり執行部と代議員との交流が肝要で、顔を合わせて話をすると、その人の考えや振る舞いがある程度わかると思いますので、そうした機会をどうつくるか考えていきたいと思います。

尾﨑　忙しくて医師会活動をする余裕がないという若い医師の方は多くいます。そういう方も、地域で医療に従事しているうちに自分なりの意見が出てくるものです。この仕組みはおかしいんじゃないか、こう変えたらいいんじゃないか、

02 若い力を育てて連携する 新しい仕組みで困難を乗り越える

たとえばそういう思いを医師会で話したらみんなで意見をもっと練って、行政に要望するという話になり、自分の意見で世の中が変わることがあるわけです。社会を動かすような経験をすることで、自分の視野も活動の場も広がっていきます。医師会活動がほかでは経験できない喜びにつながることをわかってもらえれば、医師会に入るだけでなく、将来役員になって自分が医師会を引っ張っていこうという気持ちの醸成にまでつながると思っています。若い会員に向けて、そういう経験につながる機会を創出することが私にとっても窪田先生にとっても課題になりますね。

窪田　いつか尾﨑会長には「医師会活動は大人のクラブ活動だ」と申し上げたことがありました。医師会に入られる先生は家業を継がれた方が多いわけですが、そうすると皆さん結構孤独なんですよね。それまで病院や医局に属していた先生が、地域の中で一人で何でもやらないといけなくなるときに医師会に入って周りの先生方と交流を持つことができるのはとても心強いことです。先ほど尾﨑会長がおっしゃったように、一人では実現できないことでも医師会の活動を通してみんなで力を合わせれば世の中を少し動かせるという喜びを実感することで、大きなやりがいを見い出せるのではないかと思います。ほかの道府県医師会と比べて東京都医師会は社会に対する影響力やインパクトもありますから、東京都で働く医師の方はその機会がほかより多く得られますし、今後はもっと若い力が社会を変えていくような流れを生み出したいですね。

尾﨑　続いては世田谷区医師会の会長としてのお話を伺っていきたいと思います。地域医療の現状と、地区医師会が発展していくための課題をどう捉えておられますか。

窪田　コロナ禍において世田谷区では行政との交渉がうまくいかず大変な思いをしました。世田谷区役所に何度も足を運び、執行部みんなで力を合わせて乗り越えられたことは自信になっていると思います。これからのアフターコロナもさまざまな問題が残っておりますので、目の前にあることを粛々とやっていくしかないと思っています。

世田谷区医師会の一番の問題は、A会員が700人以上もいて会員数が多いことです。10の部会に分かれていて部会ごとに部会長がいます。新しく入会された先生には、医師会活動に必ず参加してくださいと最初からお願いして、学校医や介護認定審査会などの各事業に振り分けて、まずは部会で仕事をして

もらうようにしています。部会で能力を発揮された先生は世田谷区医師会全体の仕事をしていただき、さらに力があればぜひ東京都医師会にと推薦していて、おかげさまで世田谷区医師会からは理事が2名、私を含めて計3名が東京都医師会に参加させていただいており、とてもありがたいと思っています。

尾﨑　世田谷区よりも人口が少ない県がいくつもあるわけですから、その点から見れば県の医師会会長と同じ立場であるとも言えますね。

窪田　都心部の地区医師会はそのような規模になりますね。一方で今年6月に国分寺市医師会が北多摩医師会から分離・独立して東京都医師会と直結しました。東京都医師会と地区医師会が直接対話し、情報交換することについて尾﨑会長はどうお考えなのでしょうか。

尾﨑　東京都医師会と地区医師会の間に取りまとめをする医師会が入ってしまうと、その医師会までは我々の意見は伝わりますが、それを事務局がどう判断して会長がどう捉えるかによって、傘下の医師会に説明するときに私たちが一番伝えてもらいたかったことが伝わらないということがあります。書面にしてしまうと何を訴えたいかがすべて並列に扱われてしまいますが、東京都医師会に直接来ていただいて話をするときちんと伝わるんですね。役員一人ひとりがどういう考えを持った人なのかもわかりますし、何より有事の際にはスピード感のある意思伝達ができます。

窪田　直接伝わった方がいいと思いますし、私も東京都医師会の理事会に参加させていただいているので、そこで議題となったことなどを毎回地区医師会の理事会でも必ず話すようにしています。

尾﨑　あとは地域の病院に、開業支援病院という考え方を取り入れていくことを構想しています。たとえばある先生がある地域で診療所を開業したとします。その先生は初めて開業したため、その地域がどんな医療を提供しているのか、医師会はどういう組織なのか、診療所と病院はどう連携しているのか、ということがわからないと思います。そこで開業する前に2年か3年ほど、地域の病院に職員として勤めて仕事をしてもらい、その間に医師会のB会員にもなって活動していただきます。そして各病院には総合診療医の養成プログラムがありますから、専門以外の領域やいろいろな病気を学ぶうちに、地域の診療所と病院の役割がわかり、その橋渡しを医師会がしていることが理解できると思います。そうして知見も技術も磨いたうえで開業できる仕組みを今構築しようとしています。そうすると早くから医師会活動に取り組む若い先生も増えて東京都医師会にとっても地区医師会にとってもいいのではないかと思っています。

窪田　とても魅力的なお話だと思います。もう具体的に進んでいるのでしょうか。

尾﨑　病院委員会や地域医療推進委員会などで、どう連携して実際につくっていくかの議論がはじまっています。

窪田　若い力の育成はどの地区においてもありがたいことだと思いますし、かかりつけ医制度でもよりいい仕組みができそうですよね。世田谷区では地縁のない土地で開業するパラシュート開業が多く、最初から医師会に相談してくだされば と思うことが多々あるので、自信を持って開業できる流れがあると先生も安心できそうです。

尾﨑　これからの地域医療では医師同士はもちろん、病院と診療所、介護と、地域包括ケアシステムの中で多職種と連携していかないといけません。その中のリーダー的な役割はドクターが担うべきですが、今後は全員が貴重な戦力になるわけです。自分一人が連携しないで孤立していては、医療の需要も介護の需要も増えていく中で取り残されてしまいます。そこで医師会はますますつなぎ役を果たしていくことになりますが、私は新しくていいことだと捉えています。これから大変な時代が訪れますが、新しい仕組みを考えて導入していけば、まだまだ東京の医療は乗り越えていけると考えています。

03 医療の提供だけでなく都民の健康へのアプローチが重要に

窪田　東京都医師会が今後もさらに地域医療の向上を図っていくためには、医師だけでなく都民に対してもリテラシーが求められる時代になってきたように思います。都医として都民の皆さんに向けた活動について、たとえば11月5日に東京ミッドタウンで行われた「都医-Fes」は精力的な企画でした。こうした活動の場をもっと地域にも広げていただくとありがたいなと思うのですが、どうでしょうか。

尾﨑　都民の皆さんに向けたメッセージやイベントの骨格ができていれば、あとは地区医師会の独自色を出した催しができると思いますので、そうした広報活動はこれからも地域ごとに実施していった方がいいと私は思います。リアルな場で訴えかけるのが本当に伝わりますから、地区医師会で連携するのか、東京都医師会が骨格を考えるのか、方法はいろいろあると思います。

いつ誰がどこの医療機関に罹っても診てもらえる、それが日本の医療の素晴らしさであると言われてきましたが、今後それは難しくなると思います。命に関わるような本当に医療を必要としている人に最優先で届けることは不可欠です。ただ、体調が悪くなっても体力があって何日間か待てるような若い人が、ちょっと喉が痛いだけで医療機関に来てしまいます。高齢者はそれで肺炎の発見につながることもあり、きちんと振り分けをしないといけなくなると思っています。そうしたことを医療を受ける方に理解してもらって、若い人が少し体調が悪くなっても自分なりにセルフメディケーションしようという気持ちになってもらえると、非常にうまく流れができると思うんですね。今のようにすべて医師に任せきっていたらとても持ちません。

窪田　そのことについて周知と浸透を行っておかないと、あるときどこかで大きな問題となって顕在してしまいますね。そういう時代はいつか必ず来るのだから、医師側から発信していく活動は、医療を提供することとは異なりますが同じくらい重要になってきますね。医師のミッションはもう病気を診るだけではないんですね。

尾﨑　そうなんですよね。ただ自分の診療所や診察室で患者さんを診ていればいいというものではなくなって、予防を啓発することも含めて、都民の健康に対してアプローチしていくことが急務となっています。

窪田　それでは最後は東京都医師会の展望についてのお話で締めたいと思います。私個人としては代議員会をさらに活性化させたく、今後は代議員会にてフリートーキングできる時間を設けたいと考えています。せっかく代議員の先生方が集まるのに、何の意見も出ずに閉会ではもったいないです。より活発な議論ができることを期待しています。

尾﨑　私からは、TMA近未来医療会議にて今後出てくるであろう東京の医療の問題を皆さんにお伝えしたつもりです。今度はその問題を具体的にどう解決できるかという議論を進めていて、それがまとまってくればこの困難な時代を乗り越えていくための指針になります。それをきちんと提示しながら、地区医師会の先生方にまで浸透するように代議員会を活性化してもらって、地区医師会と東京都医師会が一体となって取り組んでいきたいですね。すべての地区が連携して手を取り合って、東京の医療に向かうことで希望がひらけていくと考えています。本日は今後の東京の医療について議論を深めるお時間をいただき、ありがとうございました。